

Case 4

仙台市文化芸術推進基本計画



計画の名称

仙台市文化芸術推進基本計画

<https://www.city.sendai.jp/bunkashinko/keikaku/keikakumain.html>

計画期間

令和6～令和10年度(5か年)

担当課

仙台市文化観光局文化スポーツ部文化振興課
仙台市健康福祉局障害福祉部障害企画課

計画の 位置づけ

10年間のまちづくりの指針である「仙台市基本計画」を上位とする個別計画

計画の構成

「多様な個性が輝き、まちの未来を拓く～ひとりひとりがよりよく生きる文化芸術の杜～」という基本理念を掲げ、「目指す姿」を5つ設定。その実現に向けて11の「基本施策」と「目指す姿1～5を横断する施策」のもと取組を進める。

「障害/障がい」「障害者/障がい者」の表記については自治体によって扱いが異なりますが、本事例集の中では国の法律や計画で使用している「障害」「障害者」という表記に統一しています。
(「障がい○○センター」などの固有名詞を除く)



- 仙台市文化観光局文化スポーツ部文化振興課
- ★ 仙台市健康福祉局障害福祉部障害企画課



本計画のポイントとなるところについて教えてください。

POINT ①

- 「多様な個性が輝き、まちの未来を拓く～ひとりひとりがよりよく生きる文化芸術の杜～」という基本理念が示す通り、多様なひとりひとりを包み込む社会包摂につながる文化芸術活動への支援を強く打ち出しました。それぞれのプロジェクトの中でも社会包摂につながるような活動を新規あるいは拡充する形で充実を図っています。

POINT ②

- 近年、文化芸術との関連性が指摘されている「ウェルビーイング(Well-being)」の日本語訳「よりよく生きる」という言葉が、本計画にふさわしいというご意見が検討委員からあり、基本理念の副題に「ひとりひとりがよりよく生きる」という文言を採用しました。

POINT ③

- 計画策定にあたって市民意識調査を実施。「今後仙台市が文化芸術の面で注力すべきことは？」という問いに対して、「子どもたちの文化芸術に親しむ機会の充実を図る」「年齢や障害の有無に関わらずすべての人が文化芸術に親しめる機会を充実していく」といった回答が多く、市民の期待が高いという点もポイントの一つと考えています。

 基本計画を策定することによって、
具体的に達成したい目標はありましたか？

- これまで行ってきた活動を計画に位置づけることによって、予算の裏付けにつなげたいと考えました。また、仙台市内には障害者の文化芸術活動を支援するNPO・団体が多数あり、規模の小さな団体でも活発な活動を継続できるよう、何らかの形で後押ししたいと思っていました。

 仙台市の文化芸術推進計画、
障害者基本計画との関係について教えてください。

- 仙台市の基本計画を焦点として、福祉を筆頭に、他の分野—観光や教育などの様々な個別の計画と、この文化芸術推進基本計画が関連したことで、広い分野の計画と連携を図り、取組の内容についても整合性が取れたと思います。

★ 健康福祉局は「障害者保健福祉計画」を策定し、5つの基本方針を定めて施策を行っています。その基本方針のうち「共生社会の実現に向けた障害理解の促進と権利擁護の推進」では文化芸術を通じた障害理解の機会を設け、普及啓発に努めること、「自分らしさを発揮できる社会参加と就労の充実」においては障害の有無によらずあらゆる人が文化芸術に触れ、創造できる環境づくりに努めること等を重点取組として掲げています。

 どのように、二つの課が連携を進めたのかについて
教えてください。

- もともと文化振興課と障害企画課が連携して実施している取組がありました。文化芸術推進基本計画を新たに策定をすることになり、その中にインクルーシブな内容も盛り込むことが効率的であると判断し一緒に策定を行いました。

文化振興課がイニシアチブを取りながら、有識者会議に原案を諮る前など、適宜、障害企画課をはじめ関係部署と細やかなやりとりを行い、所要所で整合性を図りながら進めました。検討すべき課題、方向性などを丁寧に整理して、文書での照会も行いました。有識者会議にも関係課長に出席してもらい、推移を共有してきました。

 計画策定に際して、さまざまな準備が必要だったと
思います。障害者関連の団体に対して調査は行いましたか？

- 障害者の文化芸術活動の支援団体に、2回ヒアリングを行っています。1回目は新設する音楽ホール等複合施設整備の基本構想策定にあたり、主にハード面のお話を。2回目は本計画策定にあたり、ソフト事業についてのお話を伺いました。また、障害者の創作活動の支援団体3団体に書面でのアンケート調査をしています。さらには「すべての人がアートを楽しめるまちにするために」をテーマに、地元で活動するNPOと神奈川県NPO代表を交えてワークショップを実施。障害のある方からもいろいろなご発言をいただいて、障害のある人・ない人を分けるのではなくて、一緒に活動することが本筋であるというご意見が非常に印象的でした。



ヒアリングやワークショップを通じて、 どのような気づきが得られましたか？

- 地元には多くの障害者アートに関わる団体があることを改めて認識しました。中間支援の団体は収益化につなげることが難しく、国や自治体の単年度の助成事業によってなんとか運営を続けている実態を知りました。公演の入場料によって収入が得られる実演家と異なり、中間支援にあたるコーディネーターたちが専業として活動し続けることは非常に大きな課題だと認識し、重点プロジェクトの一つに、助成事業を位置づけています。



福祉部署では、障害者による文化芸術分野で どのような取組をされていますか？

- ★ 障害理解を深める取組として、手話のワークショップを行っています。インクルーシブな音楽イベント「とっておきの音楽祭」の主催団体に依頼し、子どもたちを対象に、手話を音楽にのせてダンスのように楽しむワークショップを児童館で4回開催し、保護者や地域の方も参加できるようにイベント会場等に3回出展しました。また、障害のある方が制作された芸術作品の展覧会・コンテストや、書道・写真・絵画教室等も行っています。



基本計画の作業内容について教えてください。

- 令和4年度から作業を開始し、令和6年3月に策定しました。改めて体系を整理して今までの事業を位置づけ、必要なものを加えていく形で計画を作成。ヒアリングやアンケートの結果は文化芸術面での強み、個性や課題として、それを生かす方向性を導きつつ、基本理念や重点プロジェクト、あるいは

具体的な取組の中に入れ込んでいきました。

庁内の関係課長会議や文書での照会、事務レベルでも個別にやり取りを重ねました。有識者会議や議会など計画の内容を外部に出すタイミングで、スケジュール感を共有しながら、事前に調整しています。予算については、調整で難航する場面もありましたが、今回重点プロジェクトとして掲げた取組については、おおむね初年度から予算化することができました。



基本計画の本編と概要版のほかに、 「わかりやすい版」を作成した理由について教えてください。

- 中間案が出る前の懇話会で有識者からいただいた「文字認識が難しい方が読み込むには内容が難しい」というご意見がきっかけです。時間的に説明会を開催することは難しく、ホームページで公開できる「わかりやすい版」を作ることになりました。もともと障害企画課で過去にわかりやすい版を作った実績があり、ページ数やレベル感を参考にしました。「わかりやすい版」を使って、有志市民による「計画の中間案を読む会」が開催され、コメントを寄せていただくなど、好意的に受け止めてもらいました。



計画を策定して、新たな課題を発見しましたか？

- 障害者に私たちの計画や施策をご理解いただくには、情報の整理・工夫が必要であることを、「わかりやすい版」の作成によって気づき、今後につなげる所存です。
今後の課題としては、本計画にどのように新しいものを組み入れていけるのか。障害者に関わる団体の運営・継続の可能性など、ヒアリングやアンケート調査で出てきた課題を拾い上げ、施策に取り込む必要があります。

我々自身が見えていない部分・課題が見えてきたことが大きな収穫だと思っています。

★ 障害のある方の芸術作品は近年その評価が上がっていると感じていますが、さらに多くの方にその価値を知っていただくことが課題と認識しています。一つの目標として、障害のある作家さんがその活動によって収入を得られるような環境を目指すことが、これからの大事な視点になっていくと思います。

一方で、作家活動をされている方に限らず、障害のある方にとって文化芸術が自己表現の手段や日常生活の喜びを得る機会となることも、文化芸術の大事な側面であると思いますので、どちらの視点も持って取り組みを進めていく必要があると考えています。

本計画は、どのように評価されていくのでしょうか。

- 今後、毎年テーマを設定して、市民を対象としたワークショップを開催する予定です。それらを通じて市民や文化芸術関係者の視点を入れた点検・評価を明示し、行っていきたいと思っています。



interview

連携
団体

特定非営利活動法人エイブル・アート・ジャパン
代表理事 柴崎由美子氏

計画策定中に、連携した活動などはありましたか？

- 計画を作っている途中に、仙台市が重点的な取組として、障害者や、障害

者を支援する団体、子育て中の方々などの意見が聞きたいのでワークショップができないかと相談され、仙台市とともに企画・運営を行いました。非公式に集まって意見を聞いていたグループも巻き込み、200人ほどが参加しました。

柔らかく、わかりやすいデザインで「リラックスできる場で自分の意見を自由に話してほしい」という主旨を伝えたチラシを制作して配布。会場の3分の1のスペースにあそびの場を設営し、障害の有無に関わらず、参加者が遊んだり待ったりでき、議論で白熱して疲れたらそこで休める工夫を施したところ、大変好評でした。この方式は、仙台市が計画している新・複合文化施設でのワークショップにおいても採用されました。

- あそびの場も作ったことで、子どもと参加したお母さんが「自分たちの話も聞いてもらえるんだ」とアンケートに書いていたのがとても印象的でした。障害のある人のなかには、自分たちが参加していいのかという戸惑いのある方がいると思います。情報そのものが少ないし、自分たちが政策や計画の主体であるという感覚を十分に育てられてきていないのではないかと考えるからです。計画に対する意見を求める前の段階で丁寧に、皆さんにとっての計画であることを説いていくなど、腰を本当に低くして一緒に進めていくという点は非常に重要だったと思います。

有識者検討委員会でのご発言はどのように生かされましたか？

- 仙台市の基本計画を最初に読んだときに、障害のある人やご家族に「みんなのものだよ」と言っていたのに、「分量が多く、使用されている言葉も難しいために完成物が読めない」という違和感がありました。それを検討

委員会でお伝えしたところ、「わかりやすい版」を作ってくれました。大切な骨格を「わかりやすい版」で押さえて、必要な時、箇所は本編で調べるといいう使い方ができ、とても良かったと思います。若い職員が伝えるべき人に伝えたいという気持ちで作成したもので、本気度を感じました。

基本計画を作成する際、調査不足もあって基礎データが不足していて、予算の配分などさまざまな課題解決につながりづらいと感じました。アンケート調査やデータなど、エビデンスがあれば課題をより明確に捉えやすくなると思います。

行政と連携してよかったこと、 メリットなどがあれば教えてください。

- 行政が持っている全市民に向けて発信する力は、NPO にはないものです。また、行政の方は異動があり、それはデメリットと捉えがちですが、異分野との連携や課を超えた連携・協働が可能になるということはメリットになります。うまくいくと大きな相乗効果が得られます。仙台市はそういう意味でも、とても良い動きをしていると思います。

計画が策定され、 活動がしやすくなったことがあれば教えてください。

- 今年度、この推進基本計画に則って社会包摂に関わる視点を重視した助成金枠ができました。活動内容に社会包摂の視点を取込んだ団体が優先的に採択されるという画期的な助成制度です。仙台市の方針により、公益財団法人仙台市市民文化事業団が助成の組立てをしたと理解しています。助成採択団体への説明会では、仙台市職員が自ら推進基本計画

を説明しました。また、弊団体ともう一つの NPO が困ったときの相談先として紹介されたことから、その後、様々な相談が増えました。これらは地域計画の中で非常に優れた施策だと思います。

今後、計画の施策を実践するにあたり、 どのようなことが必要だと思いますか？

- 私たち中間支援団体も障害のある人を福祉政策のなかに閉じずに、街歩きや音楽ワークショップなどのグループにつなげていくとか、障害者文化の外側に柔らかに包摂していく活動が必要だと改めて思いました。合理的配慮や障害のある人を受け入れる視点を一般の NPO や文化関係者の方たちに持ってもらって、関わり方や風景を変えなくてはならないとさらに強く意識するようになりました。

 interview

連携
団体

特定非営利活動法人アートワークショップすんぷちょ
代表 及川多香子氏

基本計画が策定されたことで、 どんなことが活動しやすくなりましたか？

- 現在、仙台市市民文化事業団が募集している助成事業の申請の要件の中に、この計画が引き合いに出されて重点化項目とされているところがあります。私たちとしても申請する側として、しっかり計画を読み込んだ上で、自分たちの事業の立ち位置を示しながら申請するということが明確になってきたと思いました。

文化庁の障害者等による文化芸術活動推進事業

などによって、活動領域が広がったり、

 活動の手応えを感じたりすることはありましたか？

- この事業に採択されるまでは、障害のある人との活動を大きく展開するための、委託事業や助成事業があまりなかったように思います。この委託事業に採択されたことにより、団体としても飛躍できましたし、社会の足並みと揃ってきたという実感がありました。この事業では障害のある人もない人もともに楽しむ「宮城野区子ども舞台芸術祭フラットシアターフェスティバル」を毎年開催しています。芸術祭での様々なノウハウが蓄積されたことによって、社会包摂的な取組について、今回の計画策定のプロセスはじめ、行政関連の方からのヒアリングなどの声かけがありました。それまではどうすれば文化行政との接点を持てるか糸口が見つからないままでしたので、そういう意味でも大きな影響があったと思います。

基本計画で連携や協働する場合に、

 何か想定されるような体制とか手法というのがありますか。

- 仙台市は、市民や支援団体の声を聞いて、取り入れながら計画を作るというプロセスがオープンマインドでした。協働においては、弊団体がそうですが、団体基盤が盤石とはいえず事務処理能力も高くはないので、助成事業を1つこなすだけでもとても大変です。協働を達成する手法については、助成事業が増えるのではなく、プロジェクトベースでそれぞれのセクターが得意な部分を生かして関わり合い、シナジー効果が生まれることが重要だと思います。

基本計画に基づいて、長期的な視点で

今後自治体との連携や協働を継続的行っていくためには
何が必要だと思いますか。



- 長期的に、自治体と関係団体とが連携や協働を行っていくためには、コーディネーター¹の存在が重要になってくると考えます。このことは、計画の中にも明記されました。

今後、計画の施策を実践するにあたり、



どのようなことが必要だと思いますか？

- 計画のゴールは受益者に届くかどうかであり、子どもや障害者、文化体験を必要としている人に届くということが最終目的だと思います。社会はどんどん変容していくものなので、計画は詳細には決められません。今は何が求められていて、どういう事業が必要なのかという小さいゴールを、実施者と行政側で常に共有しながら決めていく必要があると考えています。

自治体との連携によって、



あらためて気づいたことなどありますか？

- そのプロセスで、ワークショップそのものや、場作りの考え方について意見交換できたことが良かったと思います。多様なセクターが協働するためには、目的やミッションなど大きな目標を一致させることはもちろんのこと、

1 一般財団法人地域創造「地域と文化芸術をつなげるコーディネーターインタビューによる事例調査 報告書変化する地域と越境する文化の役割」(令和4年3月)
https://www.jafra.or.jp/fs/4/2/1/2/3/_/2021chousa.pdf

現場の準備に近い手法など細かいところまで丁寧に意識を合わせていくプロセスが重要だと思いました。参加された子育て中のお母さんから「すぐわかりやすかった」という声がありました。関係者でトークイベントをすると共通認識が多いため、使い慣れた言い回しや専門用語を使いがちですが、それらがわからない人を想定して話すということが新鮮で、市民の方たちの実像や認識が自分たちの中にも芽生えたように感じました。

仙台市のここに注目！

計画策定のポイント



健康福祉局の「障害者保健福祉計画」基本方針のなかに、文化芸術について記載があり、「障害の有無に関わらず文化芸術に触れ、創造できる環境づくりに努める」と定められています。これにより、文化と福祉の両セクションがスムーズに連携しやすくなっています。



障害者の文化芸術活動の支援団体にヒアリングを行ったり、ワークショップを行ったりという丁寧なプロセスが、計画の納得感につながっています。



「わかりやすい版」を別途作成したことで、さまざまな立場の方が計画を身近に感じやすくなっています。

